

# “はらはちぶんめ” No. 13

2011/7/6(水) 発行・文責 理事長 長坂徳久

※「はらはちぶんめ」は、おおらかに、ゆとりを持ってのびのびとこうよ、という願いからつけています。

## 【学童用児童本棚⑥】



アンは、孤児である。孤児院暮らしをする。

孤児であるアンの悩み・・・それは孤児であることではなく、「髪の毛が赤いこと」。

みなさんがテレビで観ていたかもしれないのは、宮崎駿・高畑勲のゴールデンコンビの作品。この本は、その「アニメ絵本」となっていて子どもにも読みやすい。



今日がどんなにつらくても、今日がどんなに悲しくても・・・  
それでも、

**明日はまだ失敗のない日！**

“明日はきっと、  
もっと素晴らしい”

赤毛のアン。孤児だったアンは、11歳の時に、生まれて初めて、定住する家を得て(他人にも  
らわれて)、「普通の子どもの日常生活」を手に入れます。

橋本市橋谷に「児童養護施設 六地学園」があります。「ろくち」と読みます。  
児童養護施設は、諸事情により家族とともに生活ができない子どもたちが暮らす施設です。  
六地学園では、2歳から18歳までの子どもたち40人(定員)が暮らします。

長坂はこの六地学園で1995年から現在まで約16年間、少林寺拳法を教えています。毎週、  
日曜日の夜に施設へ出向いて指導を続けてきました。

現在、施設が耐震工事で建て替えとなり、子どもたちや施設指導員は、約2年間の仮施設住宅  
住まいとなりました。そのため、今まで少林寺拳法の稽古をしていた「講堂」がこの間はなく、  
2年間は少林寺拳法の活動は休止とならざるを得なくなりました。

だから、少し施設での少林寺拳法指導はおやすみですが、それでも施設と長坂との関係は密に  
続いています。

施設の子どもたちと接していると、また、日々の施設での生活や様子を見ていると、

### 普通の子どもの日常生活

がいかにも、「感謝すべきこと」なのだと思っています。家族と一緒に暮らせること。あたたかい  
食事ができること。あたたかい布団で眠れること。自分の話を聞いてもらえること。など。

今でも、施設の教え子たちからたくさん連絡が入ります。いまはメールでつながったり、  
「mixi」や「Face book」(世界一のSNS・今後日本でも爆発的に流行るでしょう。)  
で急に連絡が来りもします。

長坂が、施設を卒園(18歳で出ていかざるを得ないのが卒園)や退園(18歳までに引き取りやま  
ちは自ら出ていくのが退園)した、子どもたちに聞くことは、

「いま、しあわせ？」  
ということです。全員が、  
「いまは、しあわせです。」「すごくしあわせです。」  
と言います。

施設にいた頃と比べると今はしあわせだということかもしれません。それでも、長坂はほっと  
します。

しあわせは、環境にあるのではなく、銘々の心の持ち方にある(六地学園の言葉です。)

(今日の学童より)

今日は、5時半ごろ1階で「ドリームコース」をしていると、2階がどうも騒がしい。すぐに  
上に行くと、あばれている子どもたちがいる。なんと、机の上を飛んで走っている子まで。

長坂は、  
『集合!』

叱るのはそのときの指導員に任せておいて、  
「おい、源義経か・・・?!」(八艘とびです。)

と普通の口調で(笑) 子どもたちは意味はわかっていないでしょう。しかし、長坂に言われ  
ると、それだけで、何よりの指導になるのです。(校長に注意される感覚でしょうね。)

『だれが一番あばれていたのですか?』

「OOくんと◇◇くん。」

『全員5分間瞑目をします。きちんとできたら、また自由に戻します。』(このような場合は、あ  
えて、全員にさせないと「場」の空気が変わらないのだ。)

全員が静かに目を瞑る。しばらくして、OOくんと◇◇くんの頭をそとなでてから長坂は一  
階へ戻りました。